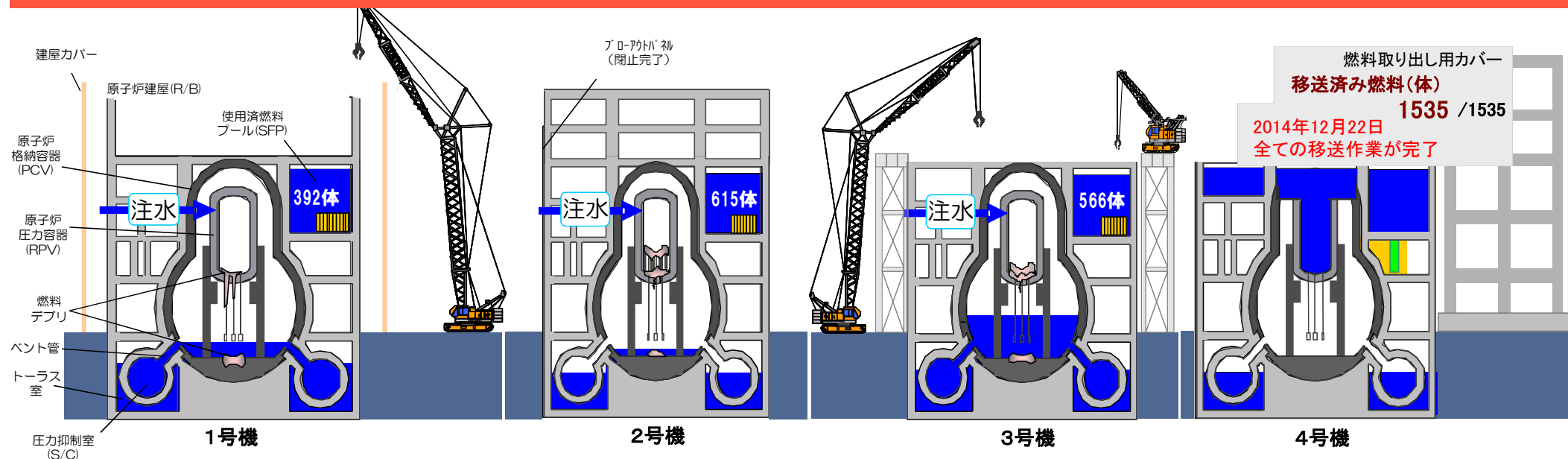


(1) 1～4号機の状況

各号機ともに「冷温停止状態」を継続



2016年10月27日 5:00 時点の値

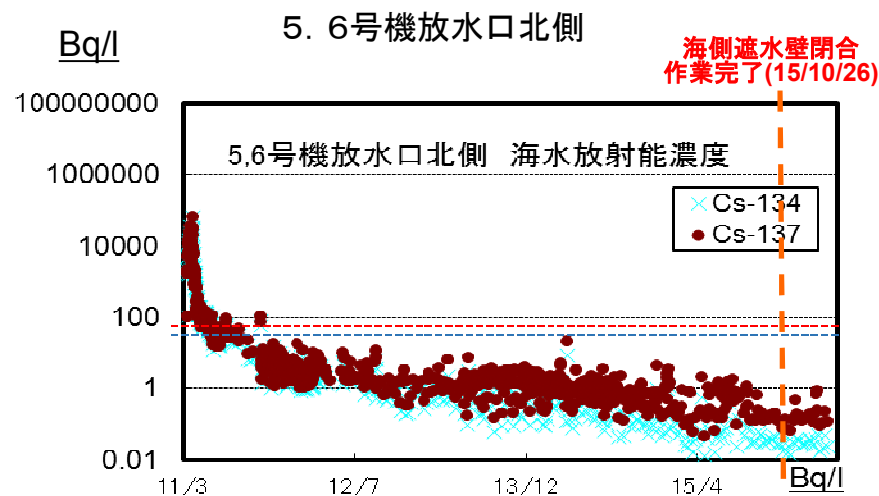
	圧力容器 底部温度	格納容器内 温度	燃料プール 温度	原子炉 注水量
1号機	約25℃	約25℃	約22℃	約4.2m ³ /時
2号機	約32℃	約33℃	約27℃	約4.4m ³ /時
3号機	約30℃	約30℃	約26℃	約4.4m ³ /時
4号機	燃料が無い ため監視不要	燃料が無い ため監視不要	約25℃	—



圧力容器温度や格納容器温度をはじめとした、プラントパラメーターは24時間、常に監視を継続

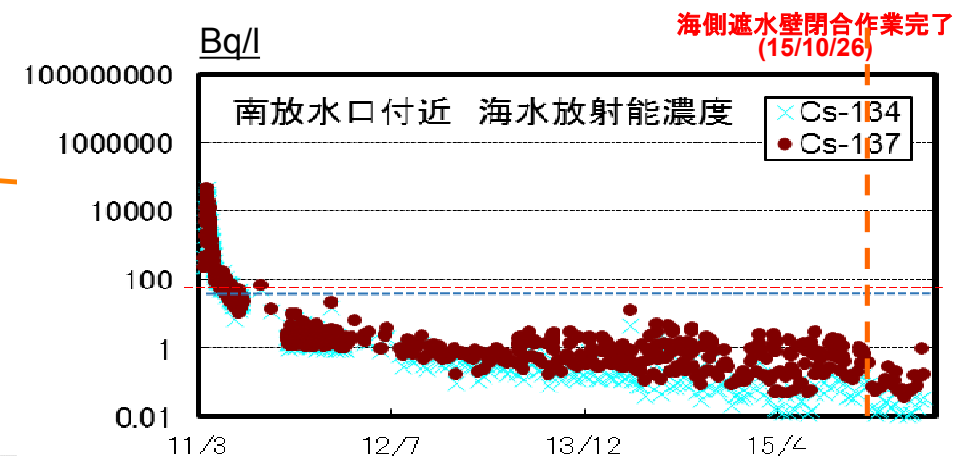
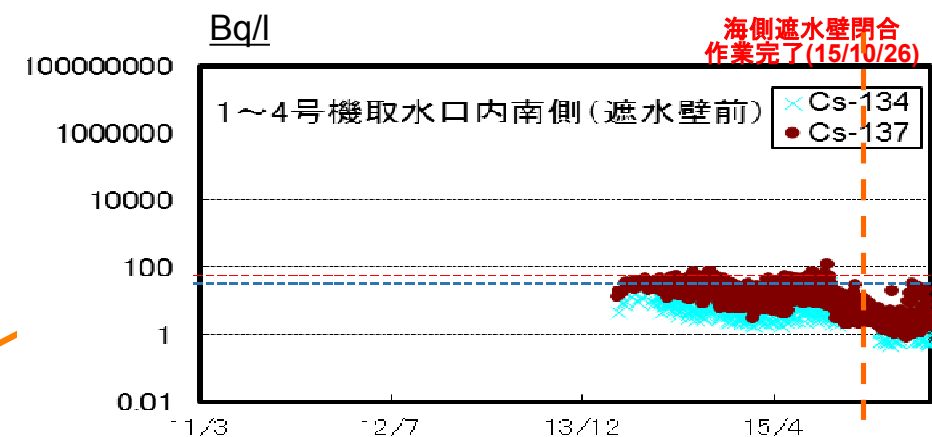
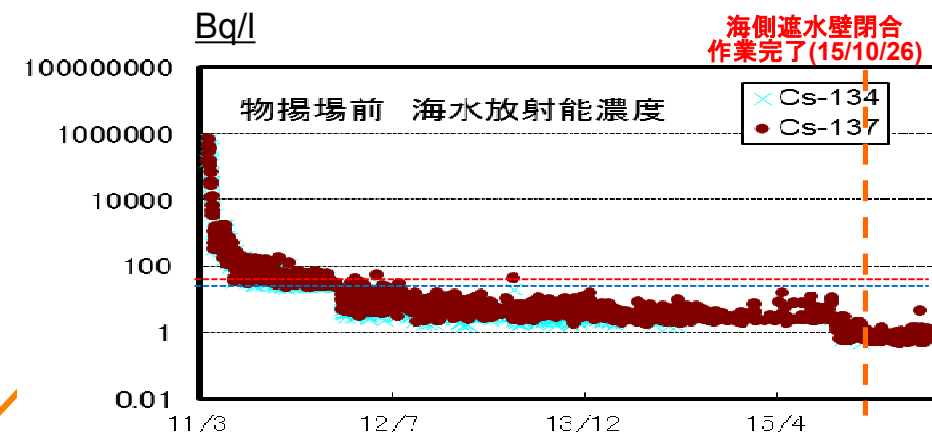
(2) 港湾内外の放射性物質濃度の変化

事故後放射性物質濃度は徐々に低下し、事故直後と比較して100万分の一程度まで低減

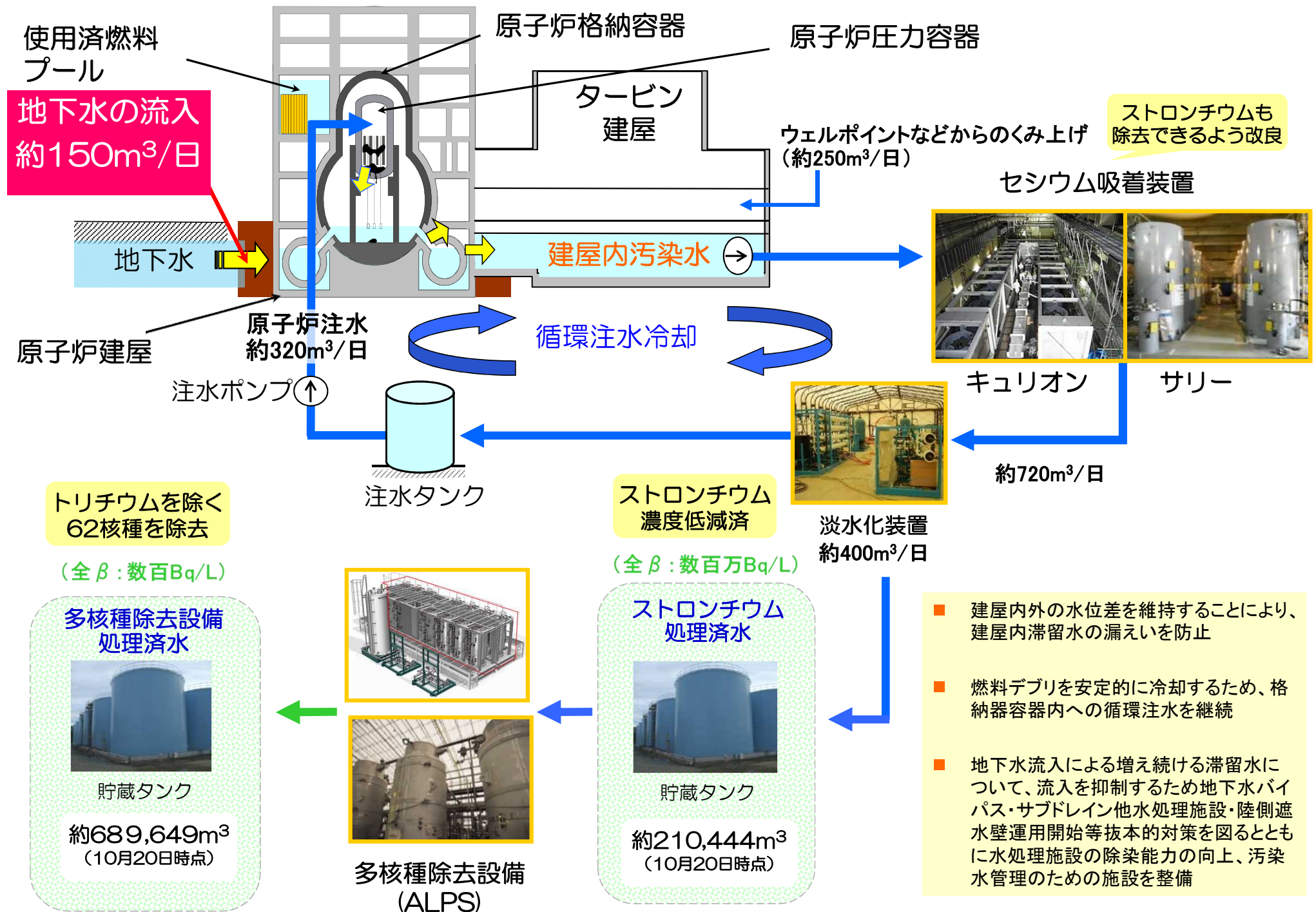


《参考》告示濃度(周辺監視区域外の水中の濃度限度)

- ・セシウム137: 90Bq/L
- ・セシウム134: 60Bq/L



(3) 汚染水と原子炉循環冷却の概念図



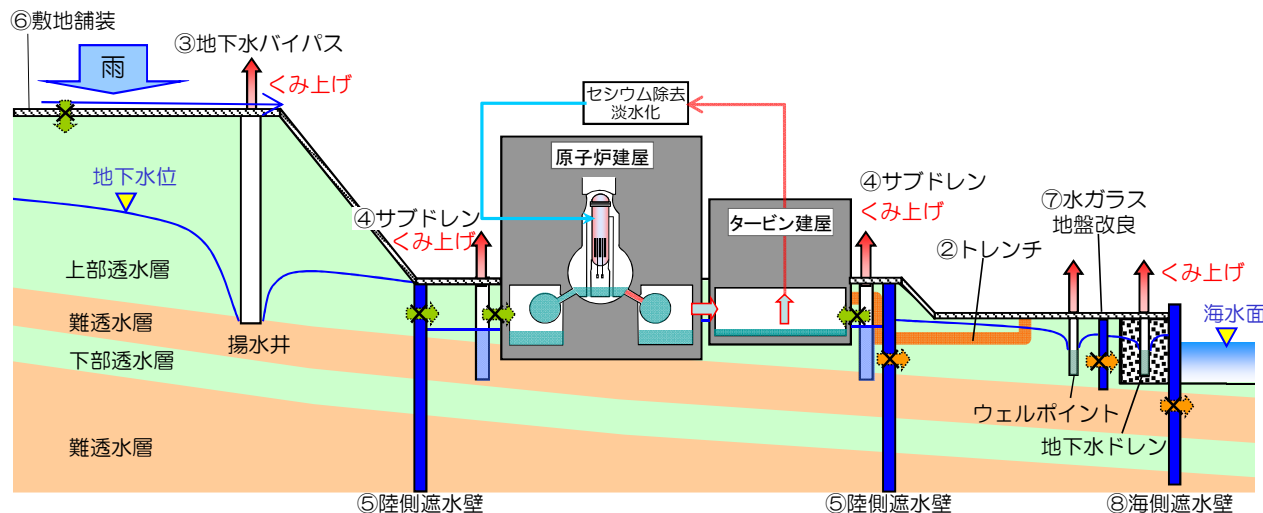
方針1. 汚染源を取り除く

- ① 多核種除去設備(ALPS)による汚染水浄化
 - ② トレンチ※内の汚染水除去 ※配管などが入った地下トンネル
- ⇒ ① 2015年5月、タンク内に貯蔵していた高濃度汚染水の浄化完了
- ② 2015年7月、汚染水除去完了

方針2. 汚染源に水を近づけない

- ③ 地下水バイパスによる地下水くみ上げ
- ④ 建屋近傍の井戸での地下水くみ上げ
- ⑤ 凍土方式の陸側遮水壁の設置
- ⑥ 雨水の土壌浸透を抑える敷地舗装

- ⇒ ③ くみ上げ／排水中(合計約22.7万トン[10月26日時点])
- ④ くみ上げ／排水中(合計約21.1万トン[10月25日時点])
- ⑤ 2016年3月、凍結開始
- ⑥ 2015年度末に概ね終了(ガレキ保管エリアを除く)



方針3. 汚染水を漏らさない

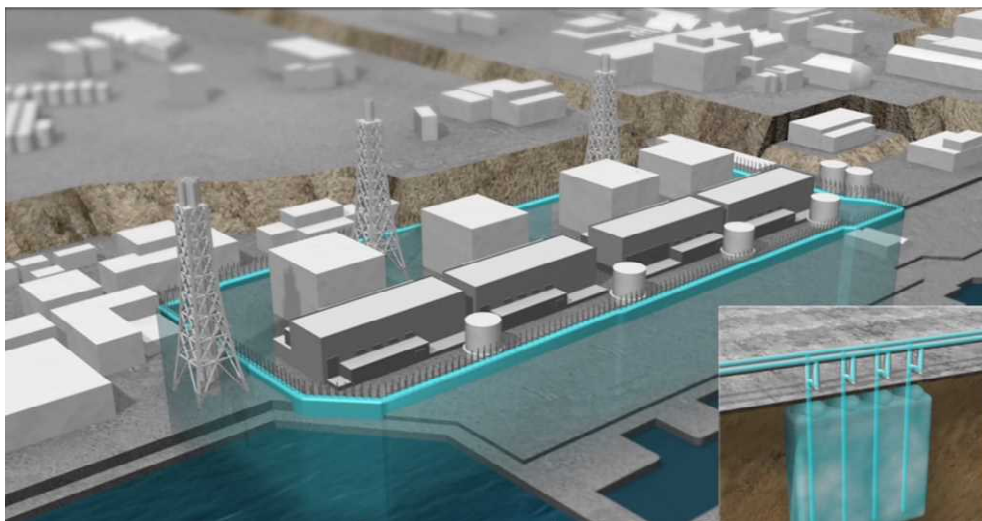
- ⑦ 水ガラスによる地盤改良
- ⑧ 海側遮水壁の設置
- ⑨ タンクの増設(溶接型へのリプレイス等)

- ⇒ ⑦ 2014年3月、水ガラスによる地盤改良完了
- ⑧ 2015年10月、閉合完了
- ⑨ フランジ型タンク→溶接型タンクのリプレイス、および地下水の原子炉建屋への流入等を踏まえた溶接型タンク増設を計画・実施中

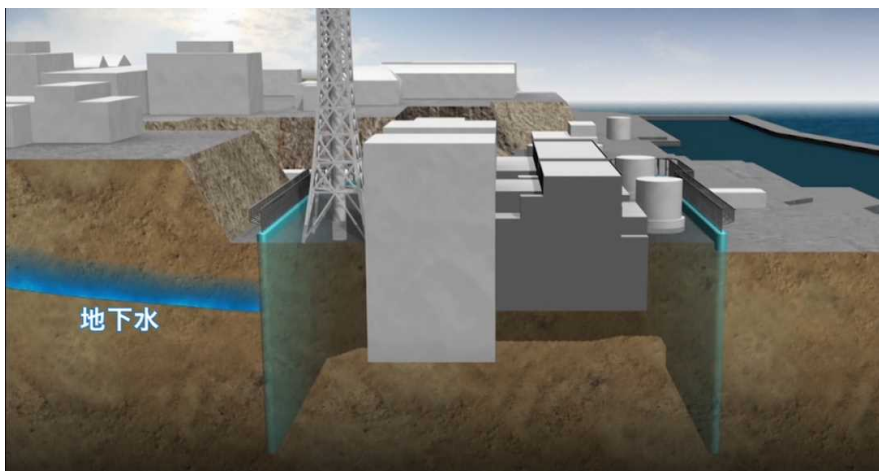


(5) 陸側遮水壁の運用開始

建屋への地下水流入を抑制、建屋内滞留水を減少させるため地下水の水位を制御



陸側遮水壁(凍結イメージ図)



地下水流入抑制イメージ

- 凍結プラント: 不凍液(ブライン: -30°C)製造装置
- システム構成
冷凍機 261kW × 30台
クーリングタワー × 30台
ブラインポンプ
- 陸側遮水壁: 延長 約 1,500m 凍土量 約7万 m^3



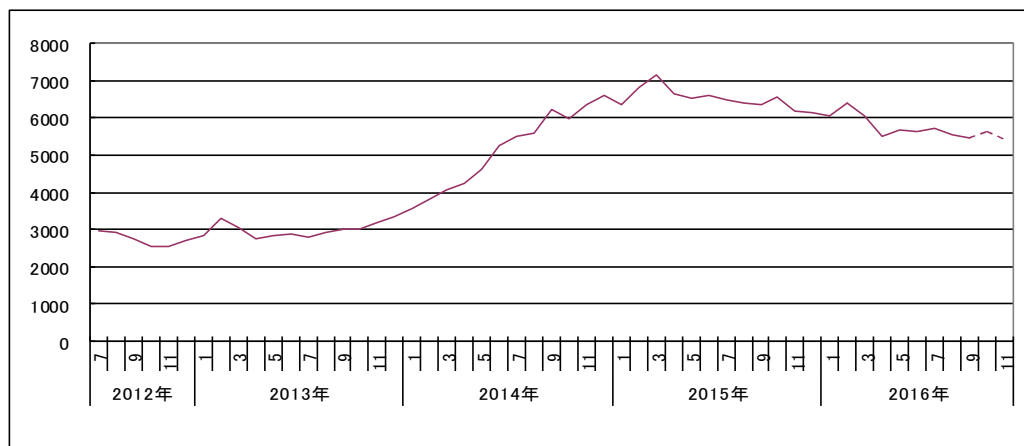
冷媒の移送管

- 2014年6月 本格施工に着手
- 2016年2月 凍結管設置工事完了
- 2016年3月31日 凍結作業開始

- 作業員の被ばく線量管理を確実に実施するとともに、長期にわたる要員の確保に取り組む。
- また、現場のニーズを把握しながら継続的な労働環境の改善にも取り組んでいく。

作業員数の推移

- 9月の作業人数（協力企業作業員及び東電社員）は 平日1日あたり5,740人
- 8月時点における地元雇用率（協力企業作業員及び東電社員）は約55%



長期にわたる安定的な雇用確保

- 40年にわたる廃炉作業を着実に進めるため、地元企業をはじめとする協力企業の方々に長期的に働いていただける環境が重要
- 物理的な環境整備に加え、長期にわたり安定的な雇用が確保できるよう、現在、福島第一の発注の約9割で随意契約を適用
- 長期的な要員確保により、より計画的な要員配置や人材育成も可能となる

労働環境の整備

■ 利便性の向上

約1,200名が利用できる構内大型休憩所を
2015年5月31日より運用開始

■ 福島給食センター（大熊町）設立
（2015年3月31日完成）

福島給食センター

- ・1日1,500食を提供
- ・福島県産食材を使用

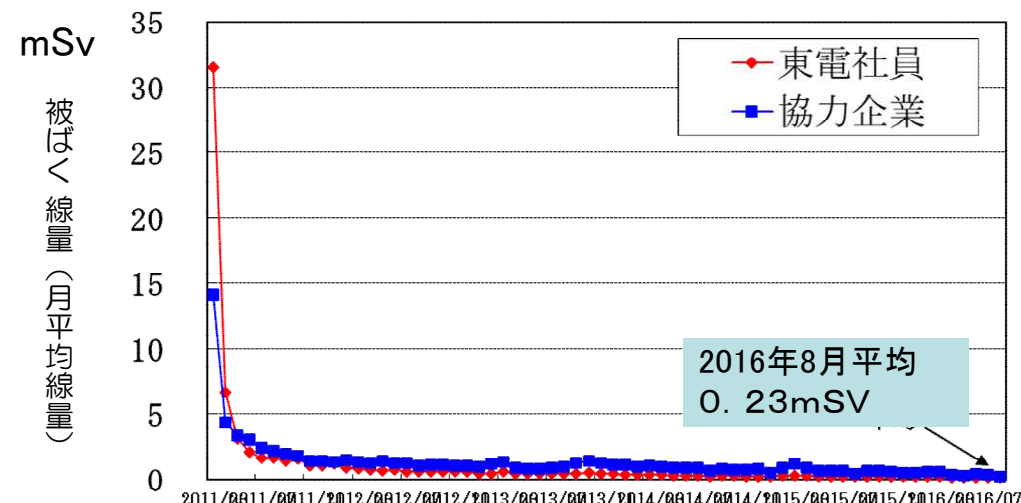


大型休憩所



大型休憩所食堂

作業員の月別個人被ばく線量の推移



(参考) 福島第一原子力発電所 構内配置図

